（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地球環境学）	氏名	Elif Berna Var（エリフ　ベルナ ヴァル）
論文題目	Conservation of Built Vernacular Heritage for Promoting Sustainable Rural Environments in Trabzon, Turkey (トルコ・トラブゾンにおける持続的地域環境構築のための風土建築保全)		

（論文内容の要旨）

本論文は、トルコ・トラブゾン市（Trabzon city）農村地域に残る地域固有の伝統住居（地域の風土や文化に培われた風土建築）の持続的な保全方法について考察するため、カラジャカヤ（Karcakaya)、ウステュンダル（Ustundal)、ディルリク（Dirlik）の３集落を調査対象として、詳細なフィールド調査をおこなったもので、全７章からなっている。

第１章は序論であり、研究の背景と目的、研究の方法、研究の構成、調査対象集落の概要を示すとともに、建築保全とコミュニティに関わる既往文献から本研究の位置付けをおこなった。研究内容としては、調査対象集落における伝統住居の現状把握、伝統住居の空間的、機能的、形態的変容とその要因、現在の保全活動に対する改善点、及びトラブゾン市における持続的な建築保全アプローチの可能性を考察・提示した。

第２章では、トルコにおける建築保全の歴史全般を概観し、農村地域の伝統住居保全はまだ発展途上であることを示した上で、先行して取り組まれているサフランボル（Safranbolu)、ジュマリキジック（Cumalikizik)、ベイパザリ（Beypazari）の事例を取り上げ、その保全活動の枠組みを整理した。またそれらと比較して、トラブゾン市の保全活動はまだ初期段階である事を示した。

第３章では、調査対象集落カラジャカヤ、ウステュンダル、ディルリクが立地するスルメネ地区（Surmene district）の地勢や歴史、自然環境、社会文化的背景について述べ、この地区の山間地形に呼応した伝統住居や農作地の配置特性、及び伝統住居の空間的、機能的、形態的な特徴について概説した。

第４章では、まず住民へのヒアリング調査によって、人口減少によるコミュニティの希薄化や新しい生活様式による世帯の核家族化などの社会文化的変化、また近年の舗装道路の開発、森林未整備による放置拡大、耕作放棄地や新規農作物栽培などの景観的変化について把握した。次に、伝統住居の実測調査と住民へのインタビュー調査を実施し、カラジャカヤ全 39 戸、ウステュンダル全 21 戸、及び調査ができたディルリク 14 戸の伝統住居の図面化と写真記録、比較資料として以前の各室レイアウト図を作成した。これを元に伝統住居の空間的、機能的、形態的な変容点を整理しその傾向を分析した。

第５章では、伝統住居に対する住民の意識について半構造化インタビュー調査をおこない、大半の住民が現代生活に沿った居住環境の改変をおこない、また将来的な改変も望む一方で、伝統住居の保全は地域にとって重要であり、積極的に取り組むべきと考えていることを明らかにした。

第６章では、これまでの調査内容に基づき、調査対象集落において伝統住居保全の潜在性（伝統住居が比較的残っており、集落住民の保全意識もある）を示す一方で、技術的・美観的な質的課題、住民関与の方法、政府等関係者との連携について改善すべきとの指針を示した。

第７章は結論であり、各章で示された主要な成果をまとめ、トラブゾン市農村地域における伝統住居の保全について具体的な枠組みを示し、将来の取り組みに向けた提言をおこなった。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、生活環境が著しく変化していく現代社会において、地域建築文化の発展的継承のあり方を探求するもので、伝統木造住居群の保全の状況が深刻なトルコ・トラブゾン市の農村地域を対象地とし調査研究に取り組んだものである。

集落住民へのインタビュー調査及びヒアリング調査、地方政府・現地 NPO 等関係者からの情報収集、建物実測調査と図面化作業など丹念なフィールド調査をおこない、トラブゾン市スルメネ地区の調査対象集落カラジャカヤ、ウステュンダル、ディルリクにおいて、伝統住居の変容状況、集落環境や住民生活の変化、保全に関する住民意識などを整理した。これらの調査結果に基づき、伝統住居の保全について具体的な枠組みを示し、将来の取り組みに向けた提言をおこなった。また、地方政府、集落住民とのワークショップを主催し、現地への研究成果還元も図った。得られた具体的な成果は以下の通りである。

１．３調査対象集落において、伝統住居の実測調査と住民へのインタビュー調査を実施し、カラジャカヤ全 39 戸、ウステュンダル全 21 戸、及び調査ができたディルリク 14 戸の伝統住居の図面化と写真記録、比較資料として以前の各室レイアウト図を作成した。これに空間的な変容（間仕切りの付加、住居の分割、開口部の変更等）、機能的な変容（部屋や水回りの更新、家畜小屋の用途変更、暖炉の不使用等）、形態的な変容（増築、窓寸法・仕様の変更、外壁のセメント利用、瓦からトタン屋根への変更等）の情報を付加し、伝統住居 74 戸の詳細な調査シートとしてまとめた。これまでは、地域保全委員会による簡易な調査記録しかなかったため、調査シートは資料的価値を有するとともに、今後の詳細記録の方法としても提示することができた。また調査資料の分析により、社会文化的背景の異なる 3 調査対象集落において、形態的な変容が一番大きいことや、変容傾向（屋根・外壁の変更、水回り設備の更新）が類似していることなど、現代生活に適応する集落住民の居住環境構築の同質性を示した。

２．集落住民への半構造化インタビュー調査（対象者 40 人）により、生活実態と住民意識を明らかにした。まず調査対象者の内、85％の住民が主農産物(ヘーゼルナッツ)収穫のため集落に一時滞在する二拠点居住者で、伝統住居は多くの場合季節的な一時利用に変化していることがわかった。伝統住居の変容に関しては、75％の住民がこれまでに空間的、機能的、形態的な変更を加え、さらに今後も必要に応じて変更する可能性があることを示した。しかし、一方で伝統住居の重要性についてはほぼ全員が同意しており、調査対象者の 95％が伝統住居の売却や解体に反対した。その理由として、伝統住居の価値に加え、個人的な思い出、先祖への敬意、次世代への相続など強い継承意識が挙げられた。これらのインタビュー調査により、現代生活への適応と同時に伝統住居を保全していく発展的継承の重要性を指摘した。

３．集落住民へのヒアリング調査により、地域保全委員会が取り組んでいる伝統住居の保全活動や支援の内容を、集落住民がほとんど認知していないことを把握し、コミュニティ参加の重要性を指摘した。この視点と調査結果をふまえ、これまで保全活動に取り組んできた地方政府、地域保全委員会に加え、集落住民がより主体的な立場をもち、現地 NPO や大学関係者など、より複合的な組織連携によって伝統住居の保全実効性を高める枠組みを提示した。

以上、本論文はトルコ・トラブゾン市農村地域の伝統住居の現状を精査するとともに、フィールド調査で得られた資料・情報に基づき、今後の持続的な風土建築保全に有意義な指針を示した。これは、まだ農村地域の建築文化保全に歴史が浅く成熟していないトルコのこれからの取り組みに有効な視点と方向を提供するものであり、学術上、実際上、社会的に寄与するとこ

ろが少なくない。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 31 年 2 月 19 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降